富士学研究
Journal of Fujiology
Vol.18 27-30 2023

モンゴルの聖山オトゴンテンゲルと富士山

黒　田　洋　一　郎＊

The sacred mountain of Mongolia: Otgontenger（Отгонтэнгэр）and Mt. Fuji

Yoichiro KURODA*

はじめに

日本人は，相撲が好きな人がモンゴル人力士の関係で少し知っているが，通常は学校で，モンゴル帝国やチンギス・ハーン(注1)を教わるだけだ。まずモンゴルと日本の外交関係にふれる。

モンゴル人は大半がチベット仏教徒である。同じ仏教国日本とモンゴルは，ソ連解体の前の1972年に外交関係を樹立し，2022年にはその50周年を記念する今年を「モンゴルとの青少年交流推進年」とすることが決まり，若い世代を含め皆さんとともに祝賀する予定だ。なお日本では余り知られていないが，モンゴルはソ連に続き，２番目に社会主義国家となった国である。

モンゴルと日本との外交関係は概ね良く，外交関係樹立35周年にはモンゴルではその記念切手も出ている。その切手のデザインが，なんと日本の聖山富士山とモンゴルの聖山オトゴンテンゲルが並んでいる（写真１）。日本人に「日本を代表する山は？」と訊けば，殆どが「富士山」と答えるに違いない。モンゴル人に「モンゴルを代表する山は？」と訊けば，「オトゴンテンゲル」と答えるからだ。なお，オトゴンテンゲル山は100トゥグルグ紙幣裏のデザインにもなっている（写真２）。日本の富士山も500円紙幣の裏に雁ガ腹摺山(注2)からの姿が描いてある。

そもそも日本人とモンゴル人は，同じモンゴロイド（形態人類学における人種分類一つ）である。その証拠に日本人やモンゴル人の尻には青いアザ：蒙古斑が見られる。その上日本人の血（正確にはDNA）には，個人的に大小はあるがモンゴル人と共通の部分があり，外見だけで何となく親しみがわく。私がモンゴルの聖山，オトゴンテンゲルを眺めるために，ウランバートル行きの飛行機に乗ったとき偶然，横綱になる前の里帰りする白鳳関一行に会った。モンゴルにもモンゴル相撲(注3)が有り，白鳳の父親はブフの横綱格だった。このオトゴンテンゲルを眺める私のモンゴルの旅は，２章で書く。

なお富士山の概要は，日本人は良く知っており，この学会のメイン・テーマなので本稿では，短くまとめる。日本ではハッキリ評価されていないが，富士山は①世界で最も名が知られている山の一つ，②一夏に約23万人以上（2019年）世界一多くの人々が頂上まで登るという希有な山，③さらに，世界で最も多く絵や版画に描かれたり。写真を撮られた山である。
（自然や富士信仰など詳しくは『私の世界百名山』60山目，富士山篇，参照）。

モンゴルの聖山オトゴンテンゲルの方は，１章で短くまとめる。

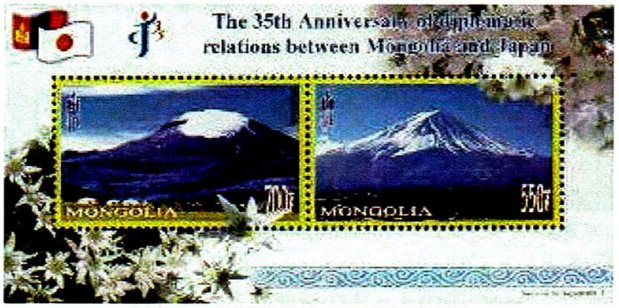


写真１：外交関係樹立35周年記念切手

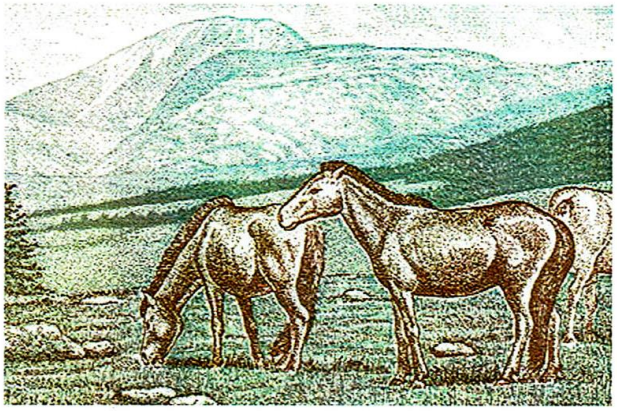


写真２：100トゥグルグ紙幣の裏（馬の背景がオトゴンテンゲル）

＊環境脳神経科学・情報センター代表　日本山岳文化学会　日本山岳会
*Representative of Environmental Neuroscience Information Center ,Tokyo　Japan Academic Society of Mountain Culture　The Japanese Alpine Club

1. オトゴンテンゲル山

オトゴンテンゲル（モンゴル語Ｏｔｇｏｎｔｅｎｇｅｒ，英語：otgontenger）はモンゴル西部にありハンガイ山脈の最高峰，標高 4,008m といわれ富士山より高い。モンゴル最高峰はフィティン山で標高 4,374 m（モンゴル語：Ｘｙｙｔｅｎ ｏｒｇｉｌ，中国語：輝騰山，フイテン山または友誼峰）は，中国とモンゴルの国境にある山である。この山は辺境にあり高いだけで，モンゴル人には殆ど知られておらず，麓のカザフ人の山であり，モンゴルを代表する山とは言えない。

オトゴンテンゲルの名は「最も若い天空の神」という意味で，昔から聖山としてモンゴル人に信仰されている。2015 年，モンゴル自然環境・観光省は，安全上の理由（聖山であるため？）からオトゴンテンゲル登山を禁止した。ところが 2017 年 10 月下旬，規制を無視した登山者 17 人が雪崩に遭い，10 人が死亡，7 人が行方不明となった。因果応報の仏教の教えが思い出される。

2. オトゴンテンゲルを眺める旅

白鳳関と会った東京からの飛行機は首都ウランバートルに着き，地方便に乗り変え西部の都市オリヤスタイに向かう。飛行場にはガイドがロシア製の四輪駆動車で迎えに来てくれており，直ぐにオトゴンテンゲルが眺められると言う，ダヤン山に向かう。車は，山の近くで道を外れ草原の中を進む。山の麓でテントを張り一泊。サイトは燃料の枯れ木が豊富で小川も近く，夕食は盛大にたき火をし，持参の肉の丸焼きが美味かった。翌日は針葉樹が疎らに植えている斜面を登る。ダヤン山頂には何と大きな奇岩がそそり立ち，山頂の広場からは東のホフ湖の彼方に，聖山オトゴンテンゲルが遠く眺められた。なんと，その為に同行したのか，オバサン（ガイドのお母さん）が，聖山に向かって五体投地をし始めた。広場の東端には，聖山オトゴンテンゲルを拝むための，チベット仏教式の拝み方：五体投地のための板があったのだ。私と連れ合いも，聖山オトゴンテンゲルを拝んだ後，オ

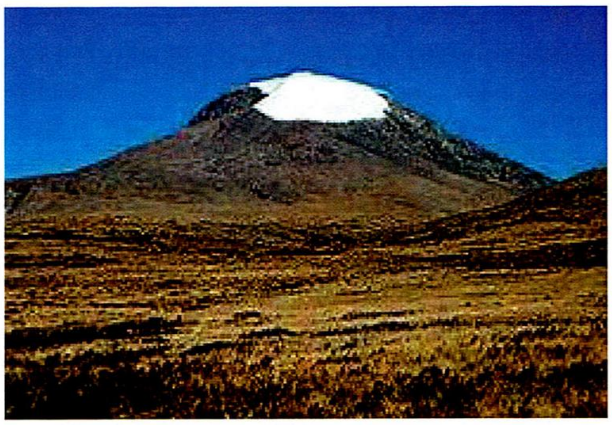


写真３：オトゴンテンゲル山の全容（９月の写真，もう雪がある）
（Wikipedia より）

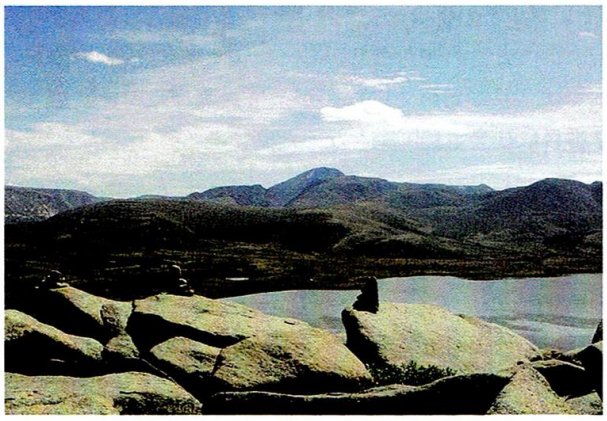
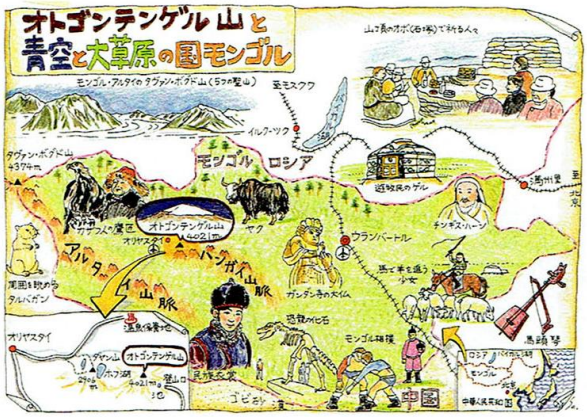


写真４：ホフ湖のかなたに聳える聖山オトゴンテンゲル
（「私の世界百名山」HP，オトゴンテンゲル篇の写真３から）



絵地図

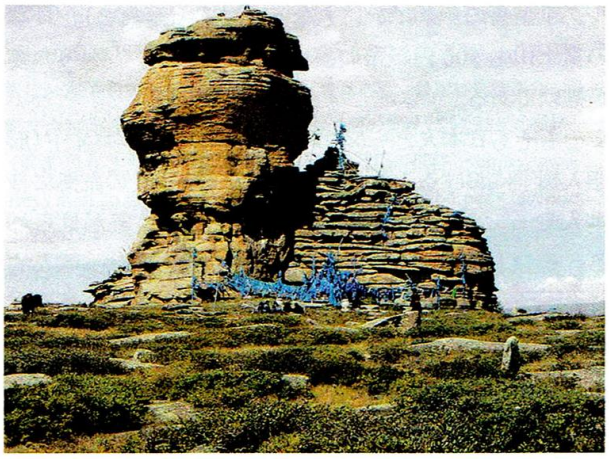


写真５：ダヤン山の奇岩，宗教的な大岩で風にたなびく青い旗で飾られている。（「私の世界百名山」HP，オトゴンテンゲル篇の写真４から）

https://eur-lex.europa.eu/eli/reg_impl/2016/1313/oj

バサンと一緒に奇岩を右回りに３周した。聖山中の聖山と言われるチベットのカン・リンポチェ（通称カイラス）のコルラ（巡礼）でも，仏教徒は山を右回りで廻る（なお同じ巡礼者でもボン教徒は左回りに廻る）。

やがて馬に乗った地元の人々が集団で登ってきて，広場での聖山を拝む儀式のあと，奇岩の前の草原で車座になって食事を始めた。我々も輪に招待され食事を共にした。彼らは，日本人が一般に同じ仏教徒であることは知っており，非常に友好的だった。ガイドの通訳もあり，いろいろ会話が弾んだ。

ガイドによると，聖山オトゴンテンゲルの反対側の東麓では，立派な礼拝所があり，後にその写真を送ってくれた（写真７）。

最後には，飲み残しのウオッカを瓶ごと呉れた。その晩，降るような星空の下，テントで皆で飲んだ。空き瓶は良いお土産で，我が家の食堂の酒のコーナーに残っているが，ラベルには白い雪と青いオトゴンテンゲル山が描いてあり，その上に赤で大きくフンダーガ，下にアルコール度３６％とある。ガイドによると，聖山オトゴンテンゲルの反対側の東麓では，立派な礼拝所があり，後にその写真（写真７）を日本まで送ってくれた。

写真６：ダヤン山に聖山オトゴンテンゲルを礼拝に来た地元の人々，（「私の世界百名山」HP，オトゴンテンゲル篇の写真５から）

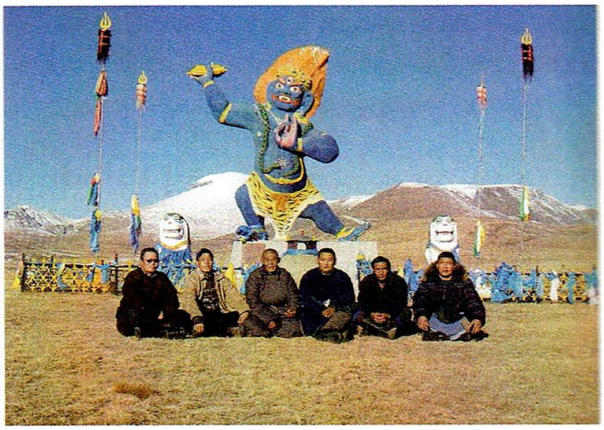


写真７：聖山オトゴンテンゲル東麓にある派手な祈願所，背景は雪におおわれたオトゴンテンゲル山。こちら側の姿は富士山に似る。（「私の世界百名山」HP，オトゴンテンゲル篇の写真８から）

その後，ダナン山を降りた，今日宿泊予定のオトゴン温泉のゲル（モンゴル風テント住宅）に車で向かう。道中の道端には，宗教的な石積み：オボー　注４）が幾つもあった。オトゴン温泉は 50 度ほどで泉質は様々，建物の外でも湧いており，岩盤浴もあった。

帰り道で，ガイドは草原で動物を見つけ，銃をもって彼が逃げ込んだ穴の近くで時機し，大部経って出て来たところを仕留めた。モルモットに似たタルバンと言う動物で，後で食べるという。

旅において道中の安全を祈願してオボーの周りを三周，時計回りに回る事（右繞 [1]）が慣習である。普通は地面から石を拾いそれをオボーの上に積み上げる。また人によっては甘いものや金，ミルクやウォッカを供える場合もある。もし車で急いでいて，オボーに立ち寄る時間がない場合は，オボーを通り過ぎる際にクラクションを鳴らすことでも良いとされる。

オボーは，主に夏の終わりに催される山岳信仰と，テングリズムの儀式にも使われる。参拝者は木の枝や棒をオボーに建て，青いカタ（khadag：儀式用の絹のスカーフで，空と空の精霊であるテングリ [注5] を象徴し体に巻きつける。やがて火が燃やされ踊りとオボーの北西に座った参拝者から供物の食べ物が供えられ，残った食べ物で参拝者の宴となる。 共産主義時代のモンゴルでは，他の宗教と同じくオボー参拝は禁止されたが，モンゴルの人々は秘密裏に参拝を続けた。

深田久弥さんの遺志 [注6] を継いで始めた『私の世界百名山』だが，世界各地の麓の人々との出会いは，このモンゴルの旅でも大変楽しく興味深く，勉強になった。

注

注１）チンギス・ハーン

13 世紀初頭にユーラシア大陸の東西にまたがる巨大国家「モンゴル帝国」を建てたのがチンギス・ハーン（王），中国では元朝を作ったのでカーン（皇帝）とも言う。その彼が本拠地としたのが，アウラガ遺跡である。モンゴル帝国 の最初の首都であるこの遺跡は，現在の首都ウランバートルから東南約 250km，デリゲルハーン村の草原の中に残っている。この遺跡は謎の多いチンギス・ハンの勃興と，モンゴル帝国の成立過程を解明する上で重要である。

アウラガ遺跡では，近くに集落や景勝地があるため，自動車が遺跡内を未秩序に往来し遺構の破壊が深刻化していた。

注２）雁ガ腹摺山の語源である雁の越える鳥道は，大峠か湯ノ沢峠らしい。この山の頂上は旧 500 円札の裏に印刷された富士山の撮影地で

ある。昭和17年11月3日午前7時，当時の国鉄大宮工機部に務めていた名取久作氏の撮った写真を原画としている。

注3）モンゴル相撲は，ブフ（蒙古語:Böke，現代モンゴル語:бөх,）と言い，モンゴルに古来より伝わる伝統的な格闘技である。起源は，紀元前3世紀頃とされ，馬を早く走らせる，力強く組み合う，弓を射ることが人々の間に広まり，この3種目を力で競い合うことから派生してきた。また宗教的な奉納儀式として，また軍事訓練的な要素も持っていた。モンゴルでは民族の祭典であるナーダムが1921年からあり，その催し物の一つとしてブフが行われている。

注4）オボー（モンゴル語：овоо）とはモンゴルで建てられる一種の標柱である。通常，石または木で作られ，モンゴルの平原や平原にある小高い丘，あるいは山頂や峠のような高所に建てられる。オボーはチベット仏教の祭礼が行われる場所であるとともに，山岳信仰，テングリといった宗教的意味を示す役割を持つが，同時に境界標識や道標としての役割も持つ。

写真８：オボーの写真（Wikipedia より）

注5）テングリ（天神，現代モンゴル語：Тэнгэр（テンゲル）は，アジア北方の遊牧民族に共通な，「天上世界」もしくは「天上神」「運命神」「創造神」を意味する概念。中国の史料上はしばしば「天」と訳されており。「テングリ」は中国における「天」の概念と似て，天上世界を指すとともに運命神であることも共通している。しかしテングリは「澄みきった青空」とも考えられており，その点で中国と違う。モンゴルの「テングリ」崇拝者が青いカタを着るのは，古く匈奴の時代から見られる。また，人格神としての「テングリ」はモンゴルの宇宙創造神話において「テングリ・ハイラハン」という地上を作った創造神として現れ，これも中国には見られない。ブリヤート族の神話では「西の善きテングリ」「東の悪しきテングリ」という表現が見られ，この二元性はゾロアスター教の影響らしい。

注6）私の大学時代はワンダーフォーゲル部で，薮漕ぎや山スキー楽しみ，無事卒部した。しかし山を続けたいし更に海外遠征をしたくなり，大学院では学術調査探検部を創部した（大学院を含み9年制，部長は泉靖一教授）。その時「一高旅行部の再建だ」と喜び，すぐに顧問になってくれたのが，深田さんだった。部の初代マネジャーとして，深田さんの東松原の御自宅には良く伺った。深田さんのマネージャー格だった志げ子夫人は，長男森太郎さんが高校の同期だったのが幸いしたのか，忙しいスケジュールの間に押し込んでくれた。当時の深田さんは，月刊『岳人』に「世界百名山」をなんと1号，3山づつ書かされていた。深田さんはヒマラヤ本以来，外国の高価な本も買い集め，丹念に読み詳しく書く流儀を持っていた。所が「世界百名山」の連載ではヒマラヤ以外の海外の山の資料は，極く少なく執筆に大変苦労され，私にコボシテおられた。深田さんの茅が岳での突然の死により連載は止まり，深田久弥『世界百名山―絶筆41座』新潮社（1974年）が残った

「晩年の深田久弥さんと世界百名山」日本山岳会報『山』2021年6月号，参照